
救世主の残念な日常

朝夢 瞬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

救世主の残念な日常

【Nコード】

N8670Y

【作者名】

朝夢 瞬

【あらすじ】

俺はどこにでもいる少しロリコンで、少し独り言が多い、いたって普通な高校生のはずだった。しかし、命懸けの人助けをして、失敗してしまったために、いろいろあつて救世主になってしまった。

この先、何が起こってしまうのか誰にもわかりはしないだろう。そう、時を操るものでさえも。

レッド……ブラッド……デッド……（前書き）

初めての作品でいろいろとおかしいところがあると思いますが、よろしく願います。

レッド！！ブラッド！！デッド！！

俺は、汗のにおいが染み付いてしまっている布団の上で目を覚ました。今日は日曜日。いつもならここで、睡魔に負けて夢の世界へ、再入場するところだが、今日は違った。

なぜ・・・なぜ俺は血だらけなんだ！！

そう、俺は血の海とかした布団の上で血だらけで倒れていたのだ。不思議と、痛みは全くない。

思い出せ！！俺！！今日の行動を明確に。それでいてスマートフォンに。「そうだ、携帯を見れば」俺はつぶやくと同時に、起き上がり青色から見事なまでの赤色に変わったジーンパンの右ポケットに手をつ込み、携帯を・・・いや、何かの破片を取り出した。その正体は分かっていたが、しばらく携帯を探していた。

くそ！！破片が入っていたが、携帯は落としてしまったのか、と自分に言い聞かせながら破片を投げた。破片は予想以上のスピードで飛び、見事に跳ね返り、俺にヘッドショットを決めた。

頭が少しのけぞる程だったが、やはり痛みはない。その一撃が、俺の脳を覚醒させ、全てのことを思い出した。そういえば・・・

「なんで目覚ましが壊れてんだよ！！」俺はろくにアイロンもかかってなく、よれよれな制服に着替えながら叫んだ。

今日は土曜日だが、俺たった一人だけ赤点をとったため、特別補修という名の八つ当たりフィスティバルが開催されるのである。

開催時間の30分後を示している腕時計を身につけ、家から出ようとした時に忘れ物に気づいた。「おっと危ない危ない生徒手帳を忘れるところだったぜ。」

独り言を言いながら、俺は『輝山 闇斗 甲桜高校二年生』と書かれている生徒手帳を学生力バンに放り込んだ。そして、はげしく太陽が照りつけるなか50m6.9秒の足で走った。風をきりながら・・・汗を輝かせながら・・・鍵をかけ忘れていた。

「うゝああゝやつと終わったあゝゝ」

俺が背伸びをしながら地獄の高校の脱出に成功したのは、8時をまわった後だった。あの野郎、利子がついたなどと言って散々、問題数増やしやがって。

俺はため息をつきながら、むしゃくしゃした時にいつも通る狭くて暗い路地を歩いていった。はつきり言っただ俺は、人との関わりをあまり持ちたくない方だ。だから、学校でも変にまとわりついてくる、ある奴以外とはほとんど会話をできない。いや、しない。

ここは最高だ、人には滅多に合わないし、車も通らないし。まさに俺に最適な環境だ。しかし、それは間違っていた。ここから10m程先の交差点の真ん中にボンヤリと人影が見えた。

こんな暗い路地で、何をしているのか疑問にも思ったが、やはりスルーしようと考えていた。断じてビビリではない。そんなことを考えながら交差点に近づいていくと、その人影は自分より2、3歳ぐらい年下であろう女の子であることが分かった。かわいいと思っってしまった俺はロリコンなんだろうか？いや、あの娘を見てかわいいと思わないのは人間じゃない。俺は頭のなかで自分のロリコンを正当化しながら、その交差点に近づいていた。

しかし、今まで考えていたことが、すべて地平線の彼方まで飛んでいきそうな程の衝撃光景が目にはいった。右の方向から怪しい紫のオーラを放つトラックが路地の狭い壁を破壊しながら、まっすぐ女の子に突っ込んで来ていたのだ。女の子は微動だにしていない。

俺の脳は一瞬でいろいろと考えていた。（何故、この路地にトラックが？なんで女の子は逃げないんだ？あのオーラはなんなんだ？）しかしいろいろ考えた俺は、行動に移したというより反射といったほうが正しい行動を起こしていた。今日の疲れでボロボロになっている自分に鞭をいれて力の限り走った。そして、俺の体はトラックまで残り1m30cm程の距離にいる女の子を突き飛ばした。

女の子のハッとした顔を見たところで、俺の体は星が美しい夜空に打ち上げられていた。景色がめまぐるしく変わっている。はげしい痛みが襲ったが一瞬で消え去った。（ヤバイ、もうこれ死んでるわ）俺はベキヤツと生きてる間には出せない音を出しながら、アスファルトの地面に打ち付けられた。

俺は空に向かって舞昇っていた。下を見ると、血だらけの俺が一人倒れているだけで、他に何もなかった。女の子も、トラックも消えていた。死ぬってこんな感じなんだな、たいして今までと変わらずに、考えることができるんだな、といういろんことを考えながらもどんどん昇っていた。

昇ってるってことは天国なのか？？よっしゃーやったぜ神様ありがと〜。もうこの世に未練はないぜとばかりにのんきな考えをしていると目の前に黒い鎌が振り下ろされた。・・・・俺は生きた心地がしなかった？？死んでるけど。

「クソッこのっ逃げんな！！」俺の周りを、正しくは俺の魂の周

りを鎌が狂った様に振り下ろされながら小学生位の女子の声が聞こえた。死神だゝゝと焦っていると俺は何かに捕まった様に凄まじいスピードで地面に向かって落ちていった。俺は二度目の死を覚悟しながら気を失った。

赤は血　　白は米

「ああそうだった。俺、死んだんだつたよ。やつと思い出した。これで血だらけの理由も分かったし、よかったよかった。」……

「って全く良くねえよ！！これからなんたらかんたら、かんたらなんたら。」と自分でもパニックになって訳わかんなくなっているところにもっとパニックを起こしてしまう様な出来事が重なった。

「どうかしたか？闘斗？？」その可愛らしい声と同時に、真っ黒な世にも珍しい服を、小麦粉かなんかで真っ白にした女の子が自称キッチンから現れた。これは奇妙な光景である。血だらけと粉だらけなのだから・・・「どうかしたのか？」もう一度聞かれた。こっちがどうかしたのかと聞きたい状況だが、もう、そんなの無視してしまおう。

「お前は何者なんだろうか。」ダメだ変な言葉になった。しかし、女の子は気にもとめない様子で「私は救世主をサポートをしている悪魔のミカ・ルネシアだ。」

もうダメだ俺の頭は変になってしまったのか。この目の前にいるロングヘアーの美少女は俺が生み出した幻想なのか。そうか！！俺は答えが分かった。「ここが天国なんですね。」女の子、いやミカに思いっきりひかれてしまった。

もういいこれが妄想か天国かなんて。とりあえず話を進めなければこの状況を打破できない。

「なぜ、俺の名前を知っているんだ？」「生徒手帳を見たから。」

「なぜ、救世主のサポートがここにいるんだ？」

「闇斗が救世主だから。」

「なぜ粉まみれなんだ？」

「おにぎりという超難関料理に挑戦していたから。」まともな答えは最初しか返ってきていないが続けてみよう。

「俺は死んだのか？」

「一回だけ。」

「パンツは何色なんだ？」

「・・・」

鋭い鎌により俺の左腕は分離に成功し、テーブルクロス引きの様に綺麗に落ちた。もう痛みがないのが普通である。ちよつとちよつとしたが。ん？鎌といえば。

「お前あの時の死神か！」「何の話だ？」「これは本当に知らないらしい。「いや、気にしないでくれ。」

そこまで聞くと、ミカは答えるのが面倒くさくなったのか紙芝居を取り出した。「これを聞けばすべてわかる。」そうミカが言ったので半信半疑ながら素直に従って見ることにした。

「救世主の仕組み 入門編 作 ミカ・ルネシア・・・」「どうした？」「拍手。」そういうことか。だがしかし「拍手したいができない。」そう、俺の左手は静かに床に待機している。ミカは納得した様に頷くと、自分で拍手をしてから紙芝居にうつった。そこまで重要なんだな。

「昔々、あるところに悪魔界と天使界がありました。悪魔と天使は神に仕える ものとして、仕事をしていました。」「ここで俺は一つの疑問が浮かび、手を上げた。

「一つ聞いていいか?」「質問は終わってから。」「睨まれてしまったので最後まで聞くとしよう。」「天使も悪魔も一人一人個性がある様に、一人一人能力を持っています。私たちはそれをマイボルと呼んでいます。天使も悪魔もそれを自分たちの仕事に役立てていました。神は能力を全て無効にする能力で全てを統一していました。だから、天使界と悪魔界はとても安定していました。」

しかし、事件は唐突に起きてしまいました。神が死んでしまったのです。理由は未だに分かっていません。突然消滅した様に消えてしまったようでした。

その神がいなくなった時、何かが起こることは、誰もが容易に想像できたでしょう。たとえ、一人だけで補修を受けてしまう人でも、鍵をかけ忘れてしまう人でも。そう、次期の神に――」

「ちょっと待て、見たのかよ。」「どうせスルーさせると思っていたツツコミに短い返答が返ってきた。」「ついさっき。」「俺がその意味を考えている間に、紙芝居は再開していた。」「次期の神になるうとする者の戦争が起こったのです。これは、神代戦争と言われています。これは、12年にも渡って続く長い戦争でした。天使も悪魔も関係なく、次期の神になりたい者が争い、死に絶えていきました。」

このままではダメだと、考えた悪魔と天使の代表者は、最終手段を使いました。人間を、救世主にしてこの世界に連れてくることです。しかし、これには大きな代償が必要でした。

その代償というものは、マイボルでした。マイボルを失うということは、個性を失うことつまり、死ぬことになるのです。代表者は、自らのマイボルを託し生き絶えました。残されたものはそのマイボ

ルをつかって究極のマイボル、真救世主を創り上げました。しかし、もう一つの難関がありました。その、マイボルの適合者を探さなければならぬのです。」

俺はここで勘付いた。「そうか！それが俺なのか！俺ってすごい奴なんだ。」一人で、はしゃいでいる俺を哀れみの目で、みながらミカはつぶやいた。

「これは、1600年代の話」俺はかなり落胆しながら、一番の疑問を口にした。「じゃあ、何で俺が救世主なんだよ。」ミカはちょっとムツとしながら「自業自得。」と言ってきた。

「どういうことだ？」俺が聞くと、ミカはため息をつき紙芝居を窓の外に放り投げた。てか、紙芝居投げちゃっていいんだ。まあ、よかったあの紙芝居あと3000ページぐらいあったからな。よく持てたもんだ。

そんなことを考えていると、ミカが俺の質問の答えを返してきた。「轢かれたから。」「はしよりすぎだろ。」「トラックに轢かれたから。」「いや、そういうことじゃねえよ。」ここはあの細かい質問方式を使うしかない。「なんで轢かれたら救世主になるんだ??」「そうしたから。」

ここからこのような意味不明な質問と回答が2時間続き全てをまとめた結果を俺が驚いた口調で、発表しよう。

「じゃあ、俺が助けた女の子が救世主候補で、あのトラックによって魂とマイボルを合成しようとしたところに、俺が乱入してしまつてなぜか奇跡的に俺にも4.3%救世主の素質があつたために、俺が救世主ということか。」ハアハア つ・・・ 疲れた。

しかし、これでは矛盾点がある。「救世主を探していたのは、1600年代でしかも、戦争も終わったんじゃないのか。」そう、戦争は終わっているはずなのだ。12年間と言っていたのだから。

「そう、1600年代に救世主も見つかり、戦争も無事終わった。でも、現在それよりもひどいことが起こっている」そんな、重要な戦争よりひどいこと？俺には考えつかなかった。いや、考えつくはずがなかった。

その、答えが返ってくるまで長い間があった。そして、待ちに待った時がきた。「あるマイボルを持つものが、神になった」ミカがため息を吐くようにつぶやいた。「その新しい神に、他の天使や悪魔が同意しなかったってことか?」俺が聞くと、ミカは首を横に降った。

そして、紙芝居を取り出した。いや、どこから出てきたんだよ。先ほどの紙芝居よりは、かなりうすいようだ。ミカは拍手をすると読み始めた。拍手に特殊な効果でもあるのだろうか。

「戦争とその後 作 ミカ・ルネシア 戦争の後、悪魔と天使の関係はかなり悪いものになってしまった。」「質問させてくれ。」「質問は後から」デジャヴを感じたが、今回は、聞かずにはいられなかった。「いや、今聞かなきゃ忘れるから。少し答えてくれないか。」「ミカは少し考えるように首を傾けた後、頷いた。

そこで、俺は最初から感じていた違和感に対しての質問をした。「天使と悪魔は仲がいいのか?後一つ、悪魔は悪い奴のイメージがあるんだが、実際はどうなんだ?」「ミカはなんだそんなことかというようにあっさりと答えた。

「悪魔は罪を犯した人間を処刑する仕事、天使は処刑された人間の魂を神に届ける仕事。簡単にいえば仲がいいというよりは、協力していたという方が正しい。」「そういうことか。人は勘違いしていたんだな。」「そして、もう一つの質問の答えは……。」

答えを目前に沈黙が訪れた。やはり悪魔は悪い奴なのか。」「こ

の笑顔が悪い奴に見えるか??」ミカは初めての笑顔を浮かべながら聞いてきた。veryかわいすぎる。さっきまで無表情だった分、笑顔が際立っている。俺は天使の笑顔の悪魔を見ていた。「カメラを持ってきていいですか。」ヤバイ本音が出たと思った。しかし、時すでに遅し、ミカが笑顔のまま俺の左足を鎌で貫いた。痛みは少しだが、肉に刺さる感触はある。

「紙芝居を続けていいか??」ミカは無表情に戻っていた。俺は頷いた。できれば、鎌を抜いて欲しいが。ミカは返り血のついた紙芝居を、読み始めた。「関係は悪化していた。天使と悪魔は、それぞれ代表者をだしてそれぞれの社会を築き、協力しなくなった。それはそれで安定していたので良かった。はつきりといってしまえば、このせいでひどいことが起きたわけではなかった。」

そして半年前、その代表者が現れた。その代表者が持つマイボルトはとてつもなく恐ろしいものだった。「ここで、ミカは紙芝居を置き聞いてきた。「どんなマイボルトだったと思う??」」

俺は急にふられてあたふたしていたが、頭に浮かんだことを述べた。「全ての破壊とか??」ミカは首を縦にはふらなかった。そして、そのマイボルトを短く説明した。しかし、その短文にはものすごい絶望感が混ざっていた。

「意識のない者全てを、操ることができる。」

左手は大切にね

「意識のない者全てを、操ることができる??」俺はそっくりそのまま返した。それと同時に、拍子抜けしていた。それならなんとかなりそうなものだが。

「その、のうりよ???いや違ったそのマイボルのどこが脅威なんだ??」ミカはそんなこともわからないのか、というような視線をこちらに向けながら説明した。「意識のない者を操れるということは、寝ている者を操れるということと等しい。つまり、今の天使界と悪魔界はそのマイボルの持ち主そのものとなっている。」

俺はそこでやっと気づいた。今起こっている事、そののうりよ???マイボルの恐ろしさを把握した。しかし、まだ重大な疑問が一つある。これがわからなければ今までの過程が無、となってしまう。

「なんで、人間の救世主が必要なんだ??」そう、これがそが最大の謎である。いくら意識のないものを操れるとしてもその代表者をなんとかできるはず、いやもしできなかったとしたら、俺一人じゃ無謀すぎるだろ。自分なりに考えていると答えが出た。

「もしかして、救世主ならその操られている者を救えるとか??」「おお、会ってから初めて察しがいいと感じた。」俺は、褒め言葉と嫌味の中尋ねた。「救世主は何ができるんだ??」

すると、ミカは「救世主完全マニュアル」これであなただも救世主」を取り出してこちらに渡してきた。俺は右手でそれを受け取るといかにも胡散臭いその本を開いてみた。

「え〜と、なになにこれを読めばどんな人でも救世主。例えば、一人だけで補修を受けてしまう人でも、鍵をかけ忘れてしまう人でも????」

俺は、わざとらしい咳払いをすると、何故か破れている本を引き続き読み始めた。「救世主の能力を簡単に説明すると、四つです。マイボル《真救世主》が手に入る、攻撃力防御力が上がる、自分の現在の強さに合わせた武器が手に入る、です。

《真救世主》は再生といくつかのマイボルの無効化です。（詳しくは34p参照）しかし、操られている者を解除するには、意識をなくさせるか、心を開かせる必要があるので、要注意」

ここまで読むとミカが「何ができるかわかった??」と本を取り上げた。救世主つてのもいろいろできて悪くないな。「てか、再生できるのかよ!!」俺が叫ぶと「そう書いてあった。現に再生してる。」と冷静に対処された。

えっマジで??俺は自分の体を見てみた。確かに服は血だらけだが、再生している。しかし、左手は今だに布団の上に転がっているし、左足なんか鎌ささったまま再生しちゃってるし。

「左手や左足はどうすればいいんだ。」「こうすればいい。」ミカは思いつきり鎌を抜いた。「少しは痛いんだぞ!!容赦しろよ!!」しかし、その言葉とは裏腹に左足の傷は再生を始めていた。

「だったら、この左手はどうするんだよ。」俺は自分の左手を、自分の右手で持ち上げるというシュールな光景のなか尋ねた。「こっするにきまってる。」とミカはというと俺の左手を俺の体の切断

面にくっつけてどうだとばかりにドヤ顔をしていた。

「あの〜いい気持ちのところすみませんが、再生してないんですが。」俺の左手は再生することなく、俺の元制服を血で汚しただけだった。ミカはハツとして目を見開くと精密機械のように、左手をつけたりとつたりを等間隔で繰り返していた。

そして、「無理!!」と左手を投げ捨てた。「いや、無理じゃねーよ!!後、投げてんじゃねーよ。」俺は、左手を化石のように慎重に持ち上げると「じゃあ、どうすればいいんだよ。」と何故か不機嫌なミカに言った。しかし、ミカは「無理なもんは無理。」「諦めて。」「残念。」とこちらに小麦k・・・米の粉まみれの服の背中を向けながらいつてきた。こっちがすねたいよ。

しかし、根気よく聞いていくと、「時を戻せば。」などと興味深いことをいつてきた。「そんなことができるのか!?!」俺が叫ぶと振り向きながら頷いた。「なんだ、そんなことができるなら早くやってくれよ。」これで身体面の問題は全て解決だな。んっ?待てよということとは「救世主の、問題も解決するんじゃないのか。」「それは無理。」即答かよ。

「そんなに簡単に救世主の力が取り消せるのならば、わざわざ人間を頼ったりしない。」ミカは大真面目に言ってきた。「そうか。まあ、とりあえず早く頼む。やっぱり手がないのは気持ち悪いからな。」もう救世主は我慢しよう。こんな可愛いサポートもいることだし。無口だが。

そんなことを思っているとミカが言ってきた。「時を戻す前にいくつか注意点がある。その全てに同意してくれないと戻せない。」「わかった」もう俺には決心しかなかったので、すぐに答えられた。

「一つ目。私のマイボルの名前は《自時回壊》というのだが、このマイボルで時を戻すと戻された時間から今にいてるまでの間の時に亀裂が入る。簡単に言えば、運命が少しおかしくなる。」「例えば、どんな感じなんだ。」

俺の質問の後、少し例えを考えていたようだったが、すぐに浮かんだらしい。説明はすぐに再開された。「例えるなら私が一週間時を戻したとする。そのときに近くにいた人と救世主はその一週間の記憶もそのまま時が戻る。もちろん、自分は好きなように行動できる。前と全く一緒のことだってできるし正反対のことだってできる。しかし、他の人は全く同じような行動をする。まあ、こちらが違うことをした際の反応は違うが前の一週間を元に動く。そして運命が変わるといふのは、そこで前と全く違う行動をする者が現れこちらに接してくるということなんだ。」

『運命が変わる』 その言葉の重みをまだ俺は知る由も無かった。

左手の大切さならわかったが・・・

ものすごい後悔　く前編く

何事も起こった後でしかわからない

by 輝山闇斗

《前と全く違う行動をする者が現れこちらに接してくるいうことなんだ》

俺はこの言葉の深い意味が理解できなかった。「おかわり。」とか、逆にそんなにヨユーとか思っていた。「おかわり！」その結果がこれである。「闇斗！！おかわりって言ってるだろー！」「わかってるよー！語りぐらいゆつくりやらしてくれよ。ルナー！」はあ、あの時もつと深く考えていれば。こんなことには・・

「本当に時を戻していいの？？」ミカが注意深く最終確認してきた。「ああ、運命が変わるくらいどうってことないって。

しかし、あの補修をもう一回受けることになるのか。」「俺が別のところでかなり落ち込んでいると、ミカからとんでもない事実が飛び出した。「闇斗、何を勘違いしてる。戻すしてもせいぜいその服が制服だと認識できていたあの夜に戻す。だから補修はない。」「良かった。本っ当に良かった。

「だったら昨日の夜に戻すのか。」「しかし、この次の言葉が補修よりも大事なことだった。「闇斗、お前の時間感覚はどうかしてる。今日はあれから一週間ほどたった日曜日だ。」「

いや、時間感覚とか言われても気絶してたし・・って、え

っ「いまなんと。」俺は混乱したらわけがわからないことになるということが判明した。

「お前の時間感。」「いや、そこじゃねえよ!!」「一週間ほどたった日曜日だ、のところか。」「そう、そこだよ。だったら、俺は学校をかなり無断欠席したのか。」「そういうことだ。まあ、どうせ時を戻すんだから、関係ない。」そっか、よく考えたら全く関係ないな。

「まあいいや。とりあえず、戻してくれ。」ミカは少し不安そうな顔をしたが、やがて手を合わせて何かをつぶやいた。「時の流れよ我に従いたまえ。パターン１ オール!!」その瞬間世界は光につつまれた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8670y/>

救世主の残念な日常

2011年12月31日06時50分発行